

# 日本語学習と異文化理解

## －ケルン日本文化会館での実践から－

岩澤和宏（国際交流基金ケルン日本文化会館）

iwazawa@jki.de

### 0. はじめに

国際交流基金（以下、基金）はJ F日本語教育スタンダード（以下、J Fスタンダード）の開発に当たって、「相互理解のための日本語」という基本的な視座を持つこととした。そして、「相互理解の日本語」を達成するには、「課題遂行能力」と「異文化理解能力」が求められるとしている。

国際交流基金ケルン日本文化会館日本語講座（以下、ケルン講座）はJ Fスタンダードの初級レベルにおけるパイロット講座という位置づけであり、初級レベルから課題遂行能力と異文化理解能力の養成に重点を置いた日本語教育を行っている。日本語学習の場面では、初級レベルから異文化理解能力が必要とされることは言うまでもないが、中級から上級へと学習を進めるに従って、異文化理解の重要度は更に増してくるものと感じられる。

本稿ではケルン講座の上級クラスにおける実践を報告し、日本語学習と異文化理解の可能性について考察する。

### 1. 海外で日本語を学ぶということ

まず、前提として確認しておくべきことがある。ケルン講座はドイツのケルンにある日本語講座であり、それは日本国内での日本語学習とは学習環境が異なるという点である。

一般に日本国内の日本語学習者は、不完全な日本語を使いながら周りの人から情報提供を受けたり助けてもらったり「よろしくお願ひ」してもらったりする存在と捉えられることが多い。日本で出版された日本語教科書には、そのような場面での会話が日本語の例としてよく使われる。学習者はマイノリティーとしての扱いである。

ところが、ドイツ（ヨーロッパ）での学習者はそれとは逆である。学習者は、日本語話者（日本人）に情報提供したり助けてあげたり、日本語話者から「よろしくお願ひ」される存在であることが多い。日本語学習者の側がマジョリティーで、日本語話者の方がマイノリティーである。

このことは、日本語クラスの目標を設定する際にとりわけ重要になってくる。日本国内での日本語学習では、必要な情報を収集できたり、周りで起こっていることを理解して環境に適応できたりすることが先ず重要な目標になるものと思われる。ところが海外の日本語学習の現場では、情報の発信が情報収集と同じかそれ以上に重要になってくる。わかりやすく単純化して言えば、日本国内では適切に道を尋ねてその答をきちんと理解できることが現実のニーズなのに対し、ドイツでは逆に日本語話者の疑問を理解し、日本語話者によくわかるように説明できることの方が重要なのである。

留学や旅行などを前提とした予備教育などではこの限りではないが、ケルン講座はそのような予備教育ではない。日本滞在を予定している学習者も少数いるが、それでも日本での日本語使用を前提とした日本語教育を行っているわけではない。

以上をふまえた上で、ケルン講座での実践の概要と検証について報告する。

## 2. ケルン講座での実践

### 2.1 ケルン講座の概要

まずは、簡単にケルン講座の概要を説明する。

1969年設立のケルン日本文化会館は今年40周年を迎えたが、翌年の1970年に設置されたケルン講座は39年の歴史を持つ一般社会人対象の夜間講座である。初級から上級まで9レベルのクラスがある。すぐに使える日本語を早く習得したいという学習者がいると同時に、高齢化社会における趣味や教養としての日本語学習という面も併せ持つ。

1985年より基金から日本語専門家が派遣されている。1990年より専門家2名体制となる。ドイツの日本語教育における拠点であると同時に、前述したように基金が開発を進めているJFスタンダードの初級レベルにおけるパイロット講座という位置づけである。

「初級レベルにおける」パイロット講座という言い方をすると、初級レベルにのみ重点を置いているような印象を与えるかもしれないが、ケルン講座における学習者の約3割が中級から上級レベルの学習者である(09年夏コースの場合、172名中52名)。一般社会人を対象とした日本語講座でこれだけの割合で中上級レベルの学習者を持つ機関は他にあまり多くない。ゼロ初級からずっと中上級まで上がってきた学習者も多く、学習者の定着率、継続率は高い。

### 2.2 ケルン講座の目指す日本語教育

ケルン講座では課題遂行能力と異文化理解能力の養成に重点を置いているが、それに加えて、「自律的日本語学習者の養成」「ネイティブ話者信仰の卒業」ということも課題としている。

ケルン講座で学ぶ学習者は、日本人のようになることを最終目標として日本語を学んでいる訳ではない。日本語を母語とする者は、学習者にとって手本になる面も多々持ち合わせているが、全ての言語行動が手本になるわけではない。

言語学習の最終目標がその言語の母語話者のようになることではなく、ネイティブ話者が常に正しいと限らない。それは特に今更確認するまでもないが、それでも無意識の内にノンネイティブはネイティブに従属しているような感覚はある。例えば、ネイティブとノンネイティブとの間にコミュニケーションの齟齬があると、ノンネイティブの側に非があったと疑われる場合が多い。

その感覚を克服したいとの思いが、特に上級クラスにはある。ケルン講座の学習者は、自分の意思で自分の時間を使って日本語を学んでいる。特に資格が与えられるわけでもなく、実益のために学習を続けているわけでもない。自分の学習は自分で管理しながら自分に役立つものを身に付けてほしいと考えている。

### 2.3 ケルン講座上級クラスにおける実践

以下に、実際に行われた上級クラスにおける実践を報告する。

- クラス名 : 9レベル(Stufe9)
- 期間 : 2009年3月17日-6月26日
- 授業回数 : 週1回 110分 全13回
- 受講者 : 10名(学生、会社員、ジャーナリスト、研究者、芸術家、年金生活者など)

ケルン講座には初級から上級まで9レベルのクラスがあり、1から5レベル(Stufe)が初級、6から8レベル(Stufe)が中級、9レベル(Stufe)が上級である。

上級クラスでは「生教材を使った授業」と、「学習者の発表」が2本柱となっている。そのふたつを補強する形で漢字の復習クイズや冠婚葬祭に関する記事の読解や民話・昔話の聴解・読解などを行っている。

「生教材」を使った授業では、テレビニュースを視聴したり、新聞記事や「人生相談」などの記事を読んだりするが、それらが理解できたら授業は終了というのではなく、そこで仕入れた材料を元に自分の意見を言ったり、クラスメートの意見を聞いて同意したり反論したりすることが求められる。全てのトピックで討論が出来るわけではないが、少なくとも感想を述べたりコメントしたりすることが求められる。「人生相談」のように具体的な問題について相談を求める記事の場合には、学習者自身がアドバイスを求められたという設定で、相談者へのアドバイスを考えなければならない。クラス内において口頭で表現し、場合によってはクラスメートと討論した後、自分の考えるところを文章にまとめる作業は翌週までの宿題となる。宿題はメールかファックス、手渡しなどの方法で提出される。教師は宿題を受け取ったらなるべく早く添削して返却する。

「人生相談」の類はそもそも日本語の記事しかないが、ニュースは場合によっては学習者が事前にドイツ語などを通して聞いている場合がある。その可能性を完全に排除することはできないが、少なくともニュース記事の場合、日本の社会事情を反映し日本語で読む必然性の高いものを選ぶようにしている。ニュースである以上、新しくなければ意味がないので新鮮なもの扱うよう努めている。

コース終了時に、授業で扱ったものの中で興味のあった記事・ニュースなどをアンケート調査したところ(09年6月23日実施、有効回答数9)、以下の回答を得た(参照:表1)。

表1 アンケート調査「興味のあった記事・ニュースなど」

	記事・ニュースなど	得点
1	北朝鮮、また短距離ミサイルを2発発射 (4月7日ニュース)	48
2	優秀な息子 就職できない (読売新聞「人生案内」より)	42
3	若い女性の「婚活」盛況 不況で経済力求め (5月12日 NHK 特集)	33
4	1歳女兒も感染、国内感染者193人に (5月12日ニュース)	33
5	人間型ロボットがモデルデビュー 日本ファッション・ウィーク開幕 (3月24日ニュース)	29
6	「心の病」で労災269人…昨年度 (6月9日ニュース)	28
7	「すぐにでもお父さんを返してほしい」比人一家の長女ら会見 (3月17日ニュース)	26
8	「漢検」前理事長ら背任容疑で逮捕 (5月12日ニュース)	23
9	一日遅れのショウブ売り (島根県の民話)	22
10	昔の万引き 今もうわさ (読売新聞「人生案内」より)	18
(以下省略)		

\*1位選出14点、2位13点、3位12点、以下同様で算出

先にも述べたとおり、意見やコメントから討論まで発展しやすい記事やニュースとそうでないものがある。上の例で言えば、1位の北朝鮮のミサイル発射に関して、コメントは多く出るが議論するポイントがない。或いは、議論まで発展させるには非常に高度な日本語力が要求される。それでもいちばん学習者の興味を引いた。2番目の「優秀な息子 就職できない」(人生案内)は、就職難や不況の問題はドイツでも共通の問題なのでわかりやすく、実感と共にコメントできる。また、息子の就職について母親が相談している点が学習者の興味を引き、日本人の親子関係や大学受験から就職活動までの問題について話し合う機会も提供することとなった。

3番目の「婚活」や5番目の「ロボット」も、議論や話し合いのきっかけを作るには十分なトピックであった。6番目の「心の病」の記事は、ドイツではもっと数が多いというコメントから、日本は労災の認定が厳しいのでは？という話に繋がった。日本とドイツの両方の事情がわかっていないと参加できない話し合いになった。

7番目の「すぐにでもお父さんを返してほしい」というのは不法入国で強制退去処分が確定したフィリピン人家族のニュースだが、規則を重視するドイツらしく、強制退去処分が適当という意見で全員一致してしまった。賛成と反対に分かれると議論になりやすいのだが、そうはならなかった。クラスではフィリピン人家族に対して同情的な意見は出ず、逆に娘を利用しているのではないかとの疑問が出された。

コースの終わりには修了試験を実施しているが、これには口頭試験と筆記試験の2種類がある。口頭試験は授業で取り上げた記事やニュースの中から学習者が自分でひとつを選び、その概要説明と何故それが一番興味を引いたかを説明する。その後自分の意見やコメントを述べて質疑応答をする。

筆記試験は、テレビニュースを2度視聴し、それに関連した新聞記事を読み、双方を総合してニュースの要旨をまとめる。またそれについての意見やコメントをまとめて書く。使われた語彙リストはドイツ語で作成し手渡すが、テレビニュースも新聞記事も過去に授業で扱ったものではない。なるべくタイムリーで新しいニュースを材料としている。

口頭試験も筆記試験も文法の正確さや表記の正確さだけを評価している訳ではない。正確さも評価の対象ではあるが、それよりも理解するべきことをきちんと理解した上で、自分の考えを発信できるかどうかを重視している。自分が理解した内容をきちんと相手に伝え、更に自分の意見やコメントを相手に伝える「実践的コミュニケーション能力」を問うようにしている。

## 2.4 ケルン講座で学ぶ学習者のニーズ

表1で示した「興味のある記事・ニュースなど」と同時に行ったアンケート調査で、ケルン講座上級の学習者にどんなニーズがあるか調査した(09年6月23日実施、有効回答数9)。その結果、「日常会話の習得」「新聞・雑誌・HPなどが読むことができるようになる」が上位に上がり、新しい情報の収集と口頭能力のニーズがあることがわかった。4技能のうちどれが重要だと考えるかという質問には、「話す」に次いで「読む」「聞く」、それに大きく差が開き「書く」であった(参照:表2)。

同じ調査は初級(09年6月22日-25日実施、有効回答数66)と中級(09年6月22日-25日実施、有効回答数16)でも行われたが、初級では圧倒的に「話す」と「聞く」が多く「読む」「書く」が少なかった。中級では様子が異なり「読む」「聞く」が最も多く、次いで「話す」、それから「書く」であった。

初級レベルでは基本的な口頭能力が重視され「読む」「書く」はやや後回しにされる。中級では語彙

を増やし漢字をたくさん覚えなければならぬので「読む」が重視され、「話す」がやや軽視されがちになる。上級では意見の表明など口頭での発信が重視されることもあり、再び「話す」が重視されるようになる。調査の結果はこのように解釈することも可能だろう。

表2 アンケート調査「4技能のうち、どれが一番重要だと考えるか」

	聞く	読む	話す	書く
上級 (9 レベル)	19	20	<b>23</b>	9
中級 (6~8 レベル)	<b>44</b>	<b>44</b>	35	18
初級 (1 ~5 レベル)	159	67	<b>163</b>	70

\*1位選出3点、2位2点、3位1点で算出

### 3. 考察1ー思想交流の可能性、ケルン/ドイツからの発信

ケルン講座の目指す日本語教育が、課題遂行能力と異文化理解能力の養成に留まらないことは先に述べた通りである。ならば、自律学習の養成やネイティブ信仰の卒業は、具体的にどのようにして可能になるのか？

それに対する明確な答を今ここで示すことは出来ないが、それに繋がる可能性が見える事例をいくつか挙げる事が出来る。

先述したように、ケルン講座上級クラスでは、修了試験でニュース/記事の要約とそれに対する意見やコメントをまとめることを求めている。09年6月に実施した試験では、「空からオタマジャクシが降ってきた？」(09年6月9日朝日新聞)の記事と、関連するテレビニュース(日テレNEWS)を使用した。要旨のまとめに続く意見、コメントでは、「夏場はニュースがないからウソを報道している。それはドイツでもある」「不思議なニュース。オタマジャクシが空から落ちるのは無理」「キリスト教の専門家に相談してみてもは？」(前後の文章略。一部書き換え)などの意見、コメントが記入されていた。

09年6月時点の日本国内では、まだ「空からオタマジャクシ」は怪奇現象だと捉えられていたようであるが、ケルンには既にそれを冷静に見る複数の学習者がいた。キリスト教の話は旧約聖書の「出エジプト記」にある空から蛙が降ってくる話のことを指しているのだが、これもキリスト教文化圏ではよく見られる反応だろう。

新聞やテレビのニュースをきちんと正しく理解できたかどうかだけを見るのではない。ニュースそのものの信憑性を問うたり、日本国内からは出にくいであろう意見やコメントが出てきたりするひとつの例である。

もうひとつの例は、同級生に大麻を売った容疑で逮捕された大学生のニュースである(日テレNEWS09年6月16日)。この大学生は同級生に大麻0.7グラムを4000円で売り渡した疑いが持たれている。本人は容疑を否認しているが、本名に加えて大学名が明かされ、本人の顔も動画で公表された。このニュースは授業で教材として扱った。

学習者の反応は「0.7グラムとは半端な量だ」「高い」「ケルン大学でも売っているらしい」という事件そのものに対するコメントから、報道の姿勢に対するコメントに移った。「0.7グラムの大麻を売るのがそんなに重い罪なのか?」「本人はやっていないと言っているのに顔をテレビに映すのか?」「ドイツでは決して容疑者の顔を公表しないし、名前も出さない」「日本はいつから容疑者の顔や名前を公

表するようになったのか？」(学習者の発言の主旨は変えず、語彙や文末表現を一部修正) などなど。

ケルンやドイツに関するコメントの真偽は確認していないが、恐らくは日本国内のニュース視聴者よりもバラエティーに富んだコメントだったに違いない。

授業ではレスポンスが出来るニュースサイトを紹介し、ニュースに関するコメントを発信したり同じ立場の読者の意見などに反応したりするよう勧めている。それは授業とは離れた個人作業になるので、自己責任で行うこととして教師の側では特に管理はしていない。

ニュースだけではなく、「悩み相談」や「人生案内」の類のサイトを紹介し、トピックに対する自分の意見やコメント、アドバイスなどを発信するよう勧めている。職場の人間関係や家族・友人との人間関係の問題などは特に日本だけの問題ではない。他にもドイツの学習者からコメントやアドバイスしやすいトピックも多くある。ここでは日本語を母語としないことがマイナスになる面は少ない。むしろ相談者や多くの読者とは違った文化に生きている学習者からの発信の方が、相談者には重宝がられるのではないか。学習者にはそのように説明し、積極的にレスポンスするよう促している。こちらでもニュースの場合と同様、特に教師の側で学習者の書き込みを管理しているわけではない。サイトの紹介はするが、後は学習者の自己判断と自己責任に任せている。

ブログや投稿サイトなどは、言うまでもなく教師の管轄外である。

#### 4. 考察2—異文化理解についての評価の必要性とその方法(課題)

クラスの到達目標があるなら、コースの修了時にはそれがどこまで達成できたかを示す必要があるものと考えられる。評価とは教師と学習者が教育と学習の結果に向かい合うことだと思う。そこには当然客観性が求められる。

「～ができるようになった」と示しやすいものはそれでいいのだが、そうでないものをどう扱うかが問題になる。例えば「異文化理解能力」である。異文化をどこまで理解したかということ客観的に測りそれを示すことは容易ではない。そもそも評価を出す必要があるのかという観点から考察を始めなければならない。

現実的に可能なのは学習者のポートフォリオを活用することだろう。ケルン講座の初級レベルではポートフォリオに「日本体験」という欄を設け、学習者がどのような場で日本を「体験」するかを記述させている。それにより「日本文化」の理解度が推察できるよう工夫してあるのだが、それは「異文化理解」の理解度そのものではない。

6.の考察1で述べたニュースや悩みに対するレスポンスをある程度組織的に行い、それらをポートフォリオに保管して「異文化理解能力」を推し量る参考には出来る。だが、上級学習者の「異文化理解」活動は多岐に渡り、日本関係の博物館や美術館への訪問や日本人との交流、イベント参加、インターネットを利用した日本のテレビや映画視聴まで様々だ。その活動の一部は上級クラスの2本柱の一つである「学習者の発表」でクラスメートと分ち合うこともあるが、「異文化理解能力」を推し量る材料を全て教師側が把握することは出来ないし、その必要もない。結果として、学習者の異文化理解活動に関しては、学習者の自主的な活動に任せて教師の側からは特に何の管理も行っていないのが現状である。

異文化理解に関する評価は以前からの課題だが、ポートフォリオの活用以外には有効な解決策を見出せないでいる。引き続き検討したい。

## 5. おわりに

かつて海外の日本語教室は、日本語や日本文化を学ぶ上で非常に大きな役割を果たしていたものと推察される。勿論今日でも大きな役割を果たしていることに変わりはないのだが、今では教室以外の場で学んだり情報収集したり練習したりすることがより容易になった。

現在ではこんなことも可能になったと報告しているうちに、それとは別のことができるようになっていく。場合によっては教師が知らないだけで、学習者には既に常識になっているということもあるのかもしれない。

方法さえ習得していれば、自律学習は以前よりはるかに容易になった。情報収集も発信も容易になった。この傾向は今後ますます強くなっていくことだろう。自律的に学ぶ学習者が増えてくると、教師の役割も期待されていることも変化してくる。

相互理解のための日本語を学び実践的コミュニケーション能力を獲得するという基本的なところはしっかりと確認した上で、社会や時代の流れに対応して柔軟な姿勢で課題に取り組んでいきたい。

### 参考文献：

- Council of Europe(著) 吉島茂、大橋理枝(訳、編)(2004)『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』朝日出版社
- 岩澤和宏(1995)「「異文化」理解としての「会話」の授業」『第8回日本語教育連絡会議報告発表論文集』第8回日本語教育連絡会議事務局 pp. 19-25
- 岩澤和宏、沼崎邦子(2009)「異文化に焦点を当てた授業と評価—ケルン日本文化会館での実践から—」『日本語教育連絡会議論文集 Vol. 21』日本語教育連絡会議事務局 pp. 26-33
- 岩澤和宏、沼崎邦子、古川嘉子、島田徳子(2009)「JF日本語教育スタンダードとCan Do記述—ケルン日本文化会館における実践—」『ヨーロッパ日本語教育13 第13回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム 報告・発表論文集』ヨーロッパ日本語教師会、トルコ日本語教師会、pp. 148-155
- 岩澤和宏、三矢真由美、カタリーナ・ドゥツス、古川嘉子(2009)「ケルン日本文化会館における日本語講座改善の試み—JF日本語教育スタンダードの試行を通じた初級講座のシラバス見直しを中心に—」『2009日本語教育シンポジウム』(予稿集)ヨーロッパ日本語教師会 pp. 46
- 嘉数勝美(2006)「ヨーロッパの統合と日本語教育—CEF(「ヨーロッパ言語教育共通参照枠」)をめぐる—」『日本語学 vol. 25』明治書院 pp. 46-58
- 国際交流基金(2009)『JF日本語教育スタンダード試行版』国際交流基金
- 西野藍・石井容子(2009)「学習者の協同と教師の関わりを重視したディスカッション練習の活動デザイン」『国際交流基金日本語教育紀要 第5号』国際交流基金 pp. 1-16
- 平田オリザ(2009)「一劇作家から見た日本語教育の課題と展望」『日本言語文化研究会論集 第5号』国際交流基金日本語国際センター 国立国語研究所 政策研究大学院大学 pp. 1-16